

## 第Ⅱ章 調 査

## 1 調査地の変遷

本報告が対象とする調査地は、平城宮朱雀門の東南に位置する平城京左京三条一坊一・二・八坪にあたる(図1)。実際の調査地は平城京左京三条一坊一坪、二坪の北辺、八坪の西3分の1に及び、一坪と二坪の間の三条条間北小路に一部かかっている(図2、PL.1・2)。一・二坪の西側は平城京朱雀大路に面し、一・八坪の北辺は二条大路に接する一等地であり、従来から平城宮の真南に位置する一・二坪が奈良時代にどのように利用されていたのかが注目されていた。

調査地周辺の発掘調査によると、平城京造営以前の古墳時代の遺構がいくつか検出されている。左京三条一坊一坪の西北隅において、古墳時代の溝および土坑 2 基が検出され、同一坪西側の朱雀大路下層においては、掘立柱建物、掘立柱塀、溝等が複数みつかった<sup>1)</sup>。同八

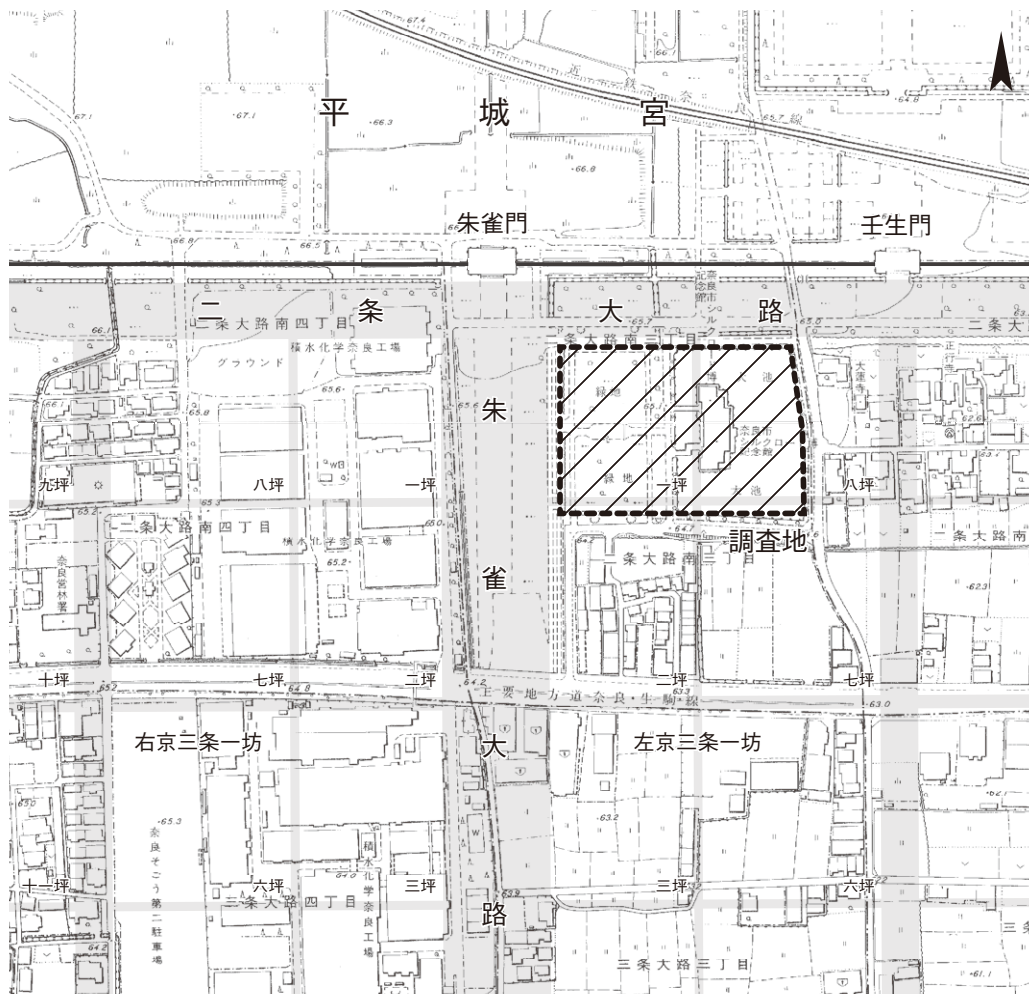


図 1 調査地の位置 1:5000

坪の北に位置する二条大路およびその北の宮内においては、5世紀後半～6世紀前半の井戸を確認した<sup>2)</sup>。7世紀には朱雀大路下層に下ッ道が敷設された。

平城宮の正門、朱雀門は遅くとも714年末までには竣工していたと考える。朱雀門前の朱雀大路、二条大路、左京三条一坊一坪もこの時点で造成は完成していたであろう。

平城宮諸門  
の 移 築

平城京から長岡京に遷都した後の延暦10年(791)9月に平城宮の諸門を長岡宮に移築している<sup>3)</sup>。調査地北西の朱雀門の移築にともない、朱雀大路や二条大路、一・八坪も何らかの変化があったであろう。こののち、大同4年(809)に平城天皇が平城宮に入り、天長元年(824)まで平城宮は維持・利用されるが<sup>4)</sup>、調査地に新たな施設の造営があったかどうかはわからない。

条 坊 道 路  
の 荒 廃

『日本三代実録』貞観6年(864)の記事には、延暦7年(788)に長岡京に遷都した後、77年たつて都城(平城京)の道路は田畑と化す、とあるように、早くも9世紀中ごろには、京内の条坊道路も次第に維持できなくなっていく<sup>5)</sup>。左京三条一坊二坪北辺の築地堀の南側溝SD1011は9世紀初頭、朱雀大路東側溝SD9920(市SD1002)は、10世紀初頭までは存続していたことが発掘調査であきらかになっている。このことは、前述の文献記載も整合する<sup>6)</sup>。平安時代中期以降、江戸時代まで当該地域がどのような変遷を経たのかは、史料や発掘調査によってもあきらかではない。

調査地に関する史料は極めて少ないが、平城宮・京を研究した北浦定政の資料によれば、江戸時代末期の状況がころうじてわかる。「平城宮大内裏坪割図稿」(図3・PL.3)<sup>7)</sup>は流布している「平城宮大内裏跡坪割之図」(嘉永5年(1852))と極めてよく似ており、ほぼ同時期の作と思われるが、後者よりも池の情報が多い<sup>8)</sup>。絵図の平城京左京三条一坊一坪に「新村池」と

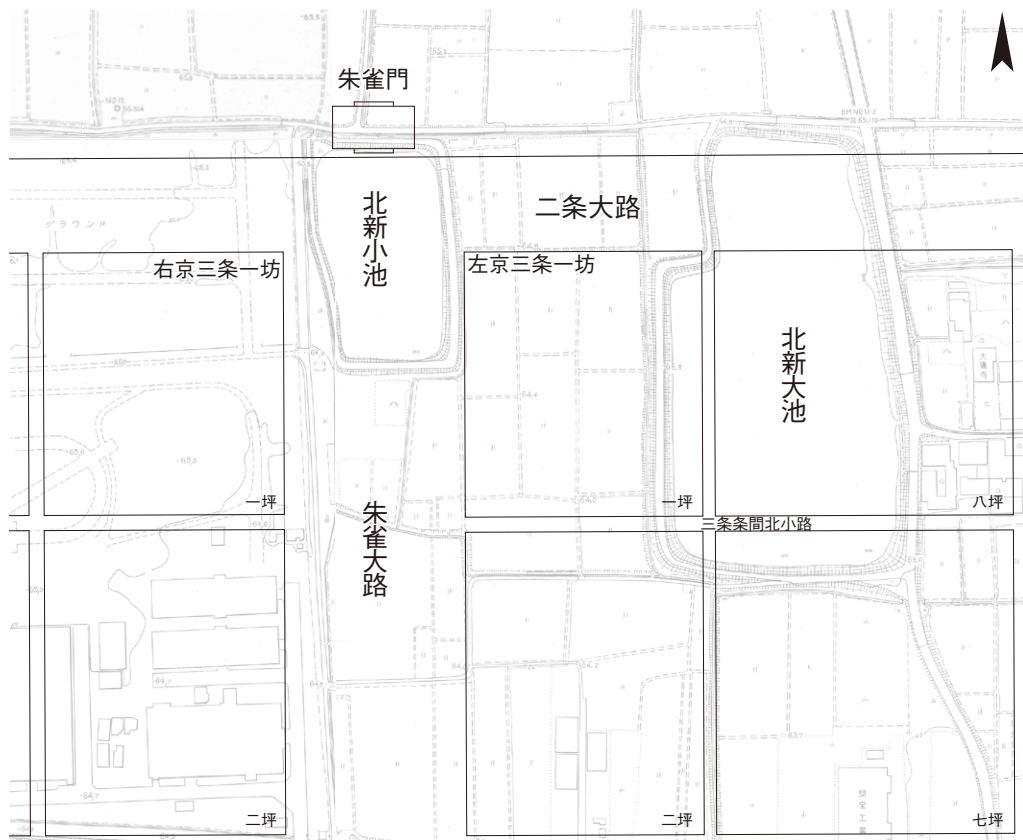


図2 左京三条一坊一・二・七・八坪の位置 1:3000



あり、位置からみて現在の「北新大池」にあたる。「北新大池」は1852年ごろにはすでに開削されていたのだろう。明治20年（1887）の調査地は水田となっており、「北新大池」の北西に小規模の池が存在する（図4上）。これは現代の「北新小池」であろう<sup>9)</sup>。「北新小池」は幕末から明治20年以前の間に造成されたと考えられる。

北新大池

北新小池

調査地の北に位置する平城宮は、大正11年（1922）に国史蹟に指定された。調査地は戦後に至るまで水田と灌漑池（北新大池・小池）があり、大きな変化はなかった（図4下）<sup>10)</sup>。平城宮は西側3分の1を追加した上で昭和40年（1965）に国の特別史跡に指定された（図5）。その後、発掘調査の成果を受けて、昭和54年（1979）には、平城宮の南面を東西に走る平城京二条大路が特別史跡に追加指定された。二条大路指定地を順次公有化していき遺跡整備をおこなった。調査地にまたがる北新大池は昭和60年（1985）に国が買収し、二条大路の遺跡整備にともない二条大路該当部分である池の北部を埋め立てた。同時に朱雀門前にあった「北新小池」も全面埋め立てた<sup>11)</sup>。

二条大路が  
特別史跡に  
追加

昭和63年（1988）に開催された「なら・シルクロード博覧会」では、奈良市が北新大池（一・八坪）の西半にシルクロード博覧会記念館を建設し、その西側の敷地（一坪）は記念館のエントランスおよび広場として整備した（図6）<sup>12)</sup>。博覧会終了後、記念館は市に寄贈され存続し、一部は中華レストランとして使用される<sup>13)</sup>。記念館西側の敷地は、朱雀大路緑地として記念館とともに奈良市が引き続き管理していた。平成2年（1990）には、平城宮跡の保存に尽力した棚田嘉十郎の功績を顕彰する銅像が造られ、朱雀大路緑地に建立された（PL.1）<sup>14)</sup>。

なら・シルク  
ロード博覧  
会の開催棚田嘉十郎  
像建立

調査地の変遷は周辺の整備事業とも大きく関わる。二条大路は昭和61年（1986）から復元表示整備を開始した。調査地西北に位置する朱雀門は、奈文研が復元研究をおこない、文化庁が平成元年（1989）から復元基壇の工事を開始し、平成10年（1998）に朱雀門の復元建物が竣工

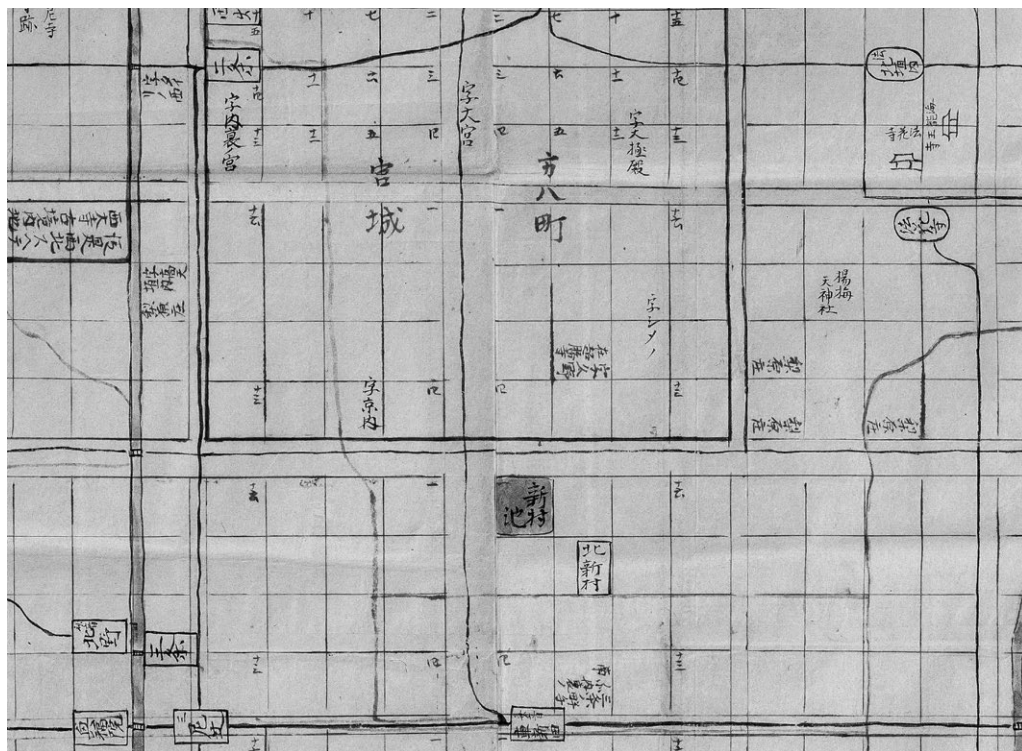
二条大路の  
整備

図3 「平城京大内裏坪割図稿」（調査地周辺部分）

国 史 跡  
平 城 京  
朱雀大路跡

した<sup>15)</sup>。一方、朱雀門の正面に位置する朱雀大路は、当時稼働していた(株)積水化学の工場敷地を除く南北210m、東西96mの範囲を平城京朱雀大路跡として昭和59年(1984)に国史跡に指定した(図5・6)。数年にわたる公有化ののち、奈良市が平成元年に仮整備を実施し史跡公園とした。しかし、朱雀門の復元建物建設にともない朱雀大路の再整備計画が持ち上がり、再整備に先駆けて朱雀大路東側溝と大路の路面等の状況を確認するため、奈良市が平成7年(1995)から翌年にかけて発掘調査を実施した。調査成果にもとづき、朱雀大路東側溝、街路樹、二坪の北辺と西辺の築地塀、下ッ道の位置などを復元整備し、朱雀門復元建物が竣工した1998年に公開した<sup>16)</sup>。

平 城 宮 跡  
歴 史 公 園  
の 建 設

日本政府は平成20年(2008)10月に、平城宮跡を既存の「国営飛鳥歴史公園」と一体的に整備を進める国営公園として「国営飛鳥・平城宮跡歴史公園 平城宮跡区域」(以下、平城宮跡歴史公園と略記)と命名することを閣議決定した。これを受けて国土交通省が特別史跡平城宮跡の国有地を中心に、国史跡平城京朱雀大路跡とその東側の敷地(朱雀大路緑地と北新大池を含む)を加え国営歴史公園の区域(面積約122ha)にした<sup>17)</sup>。

平 城 宮  
いざない館  
の 開 館

第Ⅰ章 1で先述したように、国営飛鳥歴史公園事務所は、平城宮跡の概要を解説する展示館(現平城宮いざない館)を朱雀大路緑地に設けることを計画した。奈文研が平成22年度から展示館建設予定地を発掘調査した後、平城宮いざない館が平成30年(2018)3月に開館した。同時に隣接する朱雀大路および二条大路も整備をおこない、朱雀門ひろばとして公開された(図7・PL.2)<sup>18)</sup>。



図4 明治20年の調査地周辺の地図(上)と同地の航空写真(1948年撮影)(下)



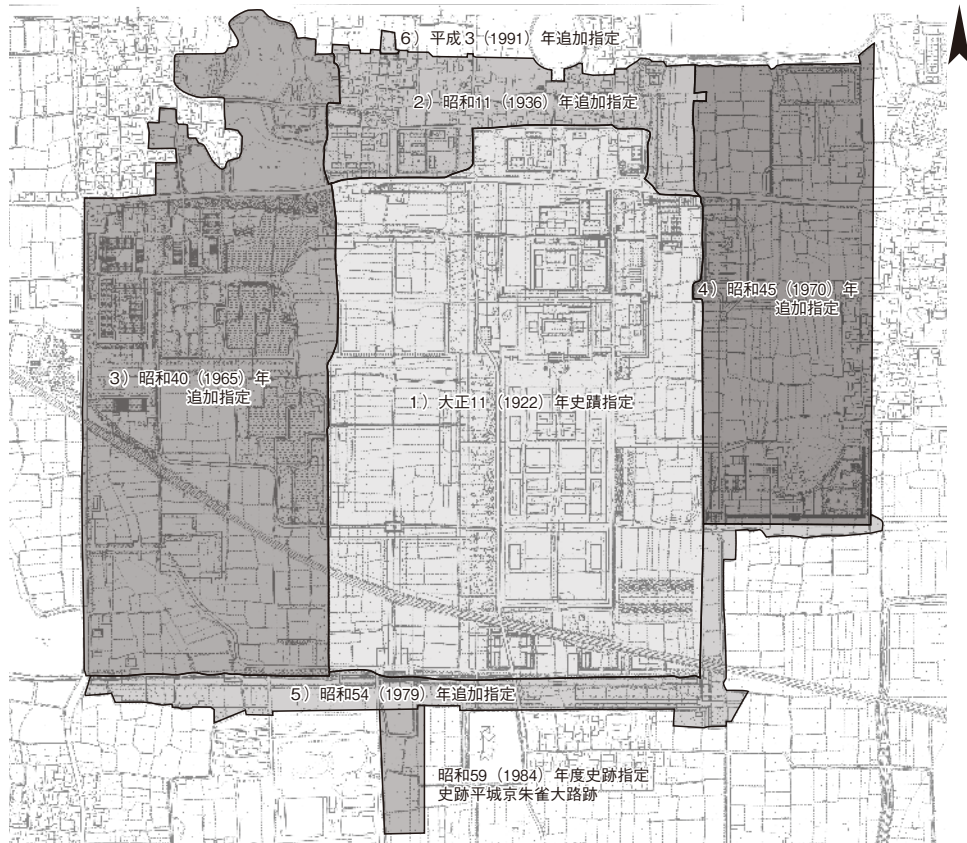


図5 平城宮跡の史蹟・特別史蹟の指定の経過

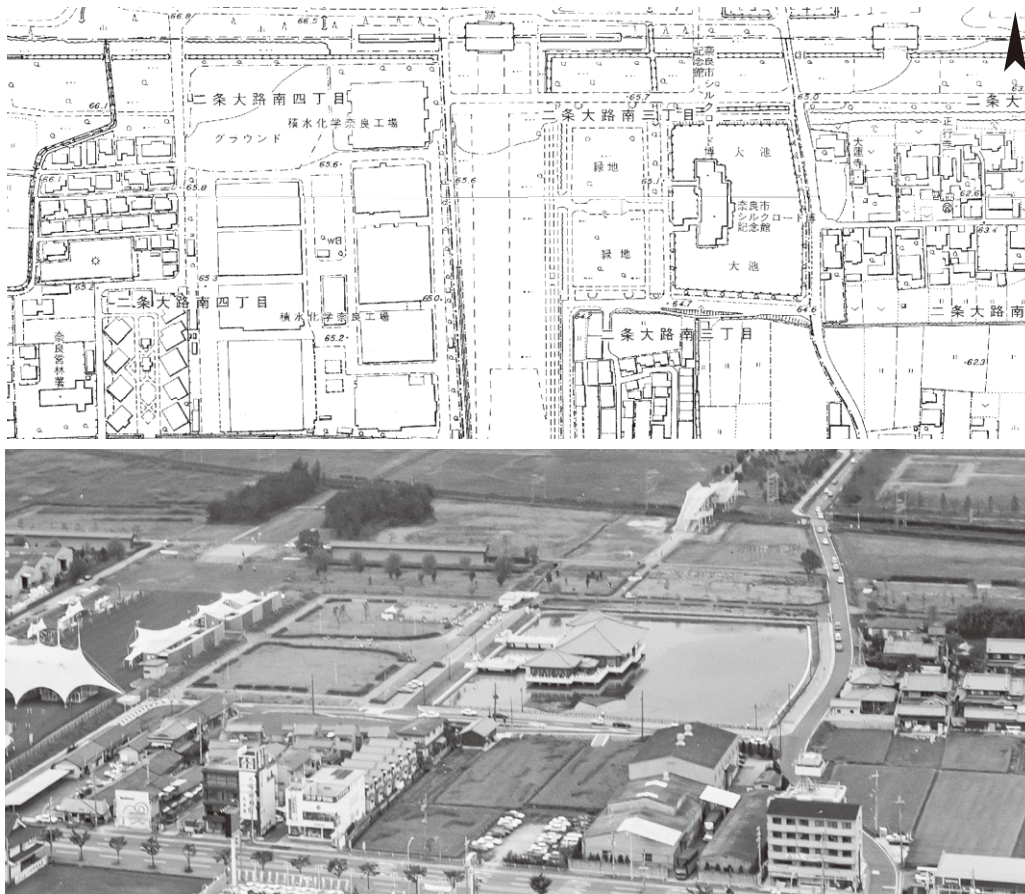


図6 シルクロード博記念館周辺の地図（上）と同地の航空写真（下）（1988年撮影 南東から）

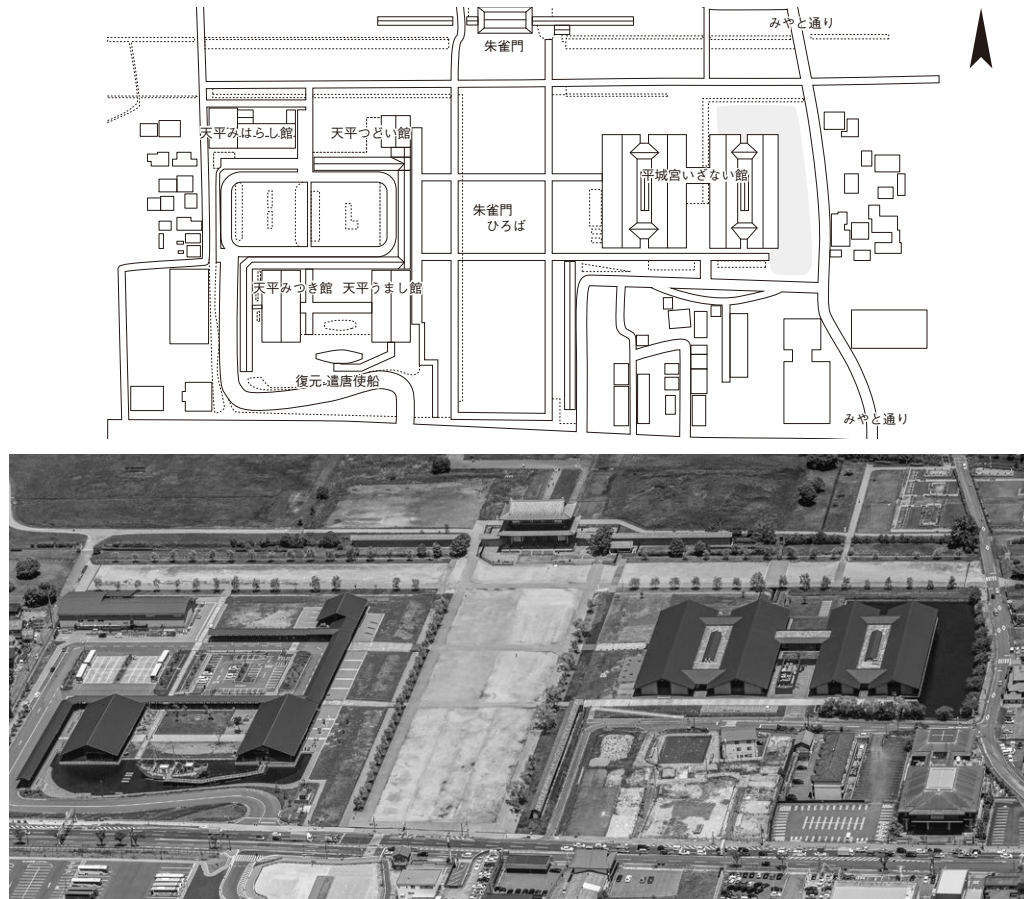


図7 平城宮いざない館周辺の現況略図（上）と同地の航空写真（下）（2023年撮影 南東から）

註

- 1) 『史跡 平城京朱雀大路跡』奈良市教育委員会、1999年。
- 2) 「壬生門西地区 第167次」『昭和60平城概報』1986年。
- 3) 『続日本紀』延暦十年九月甲戌条。
- 4) 館野和己「平城宮その後」『日本国家の史的特質 古代・中世』思文閣出版、1997年。
- 5) 前掲註4) 論文。
- 6) 前掲註1) 報告書。
- 7) 奈文研『重要文化財指定記念展平城宮跡大膳職推定地出土木簡北浦定政関係資料』2004年。
- 8) 古尾谷 知浩「北浦定政「平城宮大内裏跡坪割之図」写本の行方」『シリーズ歩く大和Ⅰ 古代中世史の探求』2007年によれば、「平城宮大内裏跡坪割図稿」は嘉永五年（1852）～安政二年（1855）の間に成立したと考えられる、という。
- 9) 大日本帝国陸地測量部「奈良」（1：2000尺）明治20年測量・明治31年発行。
- 10) 国土地理院ウェブサイト <https://mapps.gsi.go.jp/maplibSearch.do?specificationId=37781>
- 11) 「平城宮跡・藤原宮跡の整備」『年報1987』。
- 12) 財団法人なら・シルクロード博協会『なら・シルクロード博 公式記録』1989年、p87。
- 13) 「奈良市議会だより」第14号、1988年5月1日。
- 14) 「奈良市議会だより」第24号、1990年11月1日。
- 15) 奈文研『平城宮跡整備報告書』2016年、p72～73。
- 16) 前掲註1)・15) 報告書。
- 17) 国営飛鳥歴史公園事務所HP内「平城宮跡歴史公園の概要」。  
<https://www.kkr.mlit.go.jp/asuka/initiatives-heijo/summary.html> 2023年5月閲覧。
- 18) 平城宮歴史公園HP内の「平城宮跡と復原のあゆみ」  
<https://www.heijo-park.jp/about/> 2023年5月閲覧。



## 2 既往の調査

本報告で扱う調査区周辺で実施された既往の発掘調査は表1・図8の通りである。以下、一坪、二坪、八坪に分けて各調査の概略を示す。

### 一 坪

当該坪の調査には、奈良市が実施した調査も含まれるため、奈良市の調査のみ発掘調査次数の前に「市」の文字を加えて区別する。また、( )内の遺構番号は奈文研が付した番号を示す。また、今回の調査地（一坪）と既調査区（一坪西辺）の遺構は図9に示した。

**第180次西区** 本調査は、奈文研と奈良市が北新大池の北部と北新小池を埋め立てて、朱雀大路与二条大路を復元整備するための事前調査である。調査は東西2区に分けて実施した。

西区は、一坪の西北隅にあたる。ここでは朱雀大路東側溝SD9920、二条大路南側溝SD4006、および2条の溝の合流点を検出した。SD9920は幅約3.8m、深さ0.6m、合流点では3点の人形のほか木屑が滞留していたが、そのほかは、少量の須恵器片、土師器片、瓦片が出土したにすぎない。SD4006は幅約3.3m、深さ約0.4mで、木簡が2点出土したほか遺物は少なかった。また、一坪の北辺、西辺の築地塀の痕跡はなかった。

以下、奈良市の調査は、平城京朱雀門の建物復元にともなう国史跡朱雀大路跡の再整備に先立って実施した事前調査である。概要は奈良市の報告書を参照した<sup>1)</sup>。

**市第119-1次** 朱雀大路東側溝SD1002 (SD9920)、三条条間北小路SF1007 (SF9670) および北側溝SD1008 (SD9671) と南側溝SD1009 (SD9672) を検出した。SD1002は幅4.1～4.3m、深さ約0.7m、堆積土から須恵器、土師器、瓦等が出土したが、その量は少ない。SD1008は幅1.7～1.9m、深さ0.37m、SD1009は浸食を受けたため幅は不明瞭であり、遺物は少ない。

表1 調査区周辺で実施された既往の発掘調査一覧

	次 数	年度（西暦）	調査期間	面積（㎡）	出 典
一坪	180西	昭和61（1986）	1987.01.28 ～ 1987.02.16	150	「2 左京三条一坊一・八坪の調査 第180次」 『昭和61平城概報』
	市119	昭和61（1986）	1986.10.03 ～ 1986.12.16	850	
	市321	平成6（1994）	1995.02.16 ～ 1995.03.31	800	
	市336	平成7（1995）	1995.08.24 ～ 1995.12.24	409	『史跡 平城京朱雀大路跡 - 発掘調査・整備事業報告 -』 奈良市教育委員会1999年
	市343	平成7（1995）	1996.01.23 ～ 1996.03.04	224	
	市404	平成10（1998）	1998.07.03 ～ 1998.07.13	56	
二坪	市143	昭和62（1987）	1988.01.05 ～ 1988.01.08	39	「13.平城京左京三条一坊二坪の調査 第143次」 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 昭和62年度』
八坪	180東	昭和61（1986）	1987.01.28 ～ 1987.02.16	150	「2 左京三条一坊一・八坪の調査 第180次」 『昭和61平城概報』
	88-15	昭和49（1974）	1974.11.06 ～ 1974.11.08	17	『昭和49平城概報』 10pの一覧表のみ
	118-22	昭和54（1979）	1979.12.03 ～ 1979.12.06	35	「左京三条一坊八坪の調査（第118-22次）」 『昭和54平城概報』
	167	昭和60（1985）	1985.06.26 ～ 1985.10.03	1,870	「1 南面大垣の調査 B壬生門西地区 第167次」 『昭和60平城概報』
	242-3	平成5（1993）	1993.04.20 ～ 1993.04.23	24	「左京三条一坊八坪の調査 第242-3次」 『1993平城概報』
	258-9	平成7（1995）	1996.01.17 ～ 1996.01.26	42	『年報1996』 23pの一覧表のみ
	282-14	平成9（1997）	1998.02.25 ～ 1998.03.09	50	「東一坊坊間路西側溝の調査 - 第282-14次」 『年報1998-Ⅲ』
	361	平成15（2003）	2003.06.08 ～ 2003.06.20	51	「左京三条一坊の調査 - 第361次」 『紀要2004』

**市第321-2次** 市第119次で検出した朱雀大路東側溝SD1002 (SD9920) の延長部分、三条条間北小路南側溝SD1009 (SD9672)、二坪西辺の築地堀SA1010および堀にともなう雨落溝SD1011を検出した。SD1002は幅3.8～4.5mだが、最大幅は7.2m、深さは0.6～0.7m、10世紀初頭まで存続していたようである。SD1009 (SD9672) は幅3.2m、深さ0.7m、埋土は4層に分けられ最上層に瓦が含まれるほかは遺物は少なかった。SA1010は築地構築時の添柱穴があり、堀の基底幅は2.1mとなる。SD1011は幅2.7m、深さ0.4m、屈曲部では最大幅約5m、深さ0.6mに達する。

**市第336次** 2つの調査区を設定した。奈文研第180次調査区の東南に重なる第336-1次調査区では、一坪西辺には築地塀が存在しないことを確認した。このほか、古墳時代の溝や土坑を検出している。また、市第119・321次調査区の東辺に重複して設定した第336-2次調査区では、三条条間北小路SF1007（SF9670）とその南北両側溝SD1008（SD9671）・SD1009（SD9672）、および二坪西北角から東にのびる築地塀SA1010とその南雨落溝SD1011を検出した。

**市第343次** 市第336次の南に調査区を設定した。一坪西辺には築地塀が存在しないことを改めて確認したほか、坪内道路SF1013（SF9660）およびその北側溝SD1014（SD9661）と南側溝SD1015（SD9662）、道路から西へ朱雀大路東側溝を渡るための橋（SX1016・1017）を検出した。

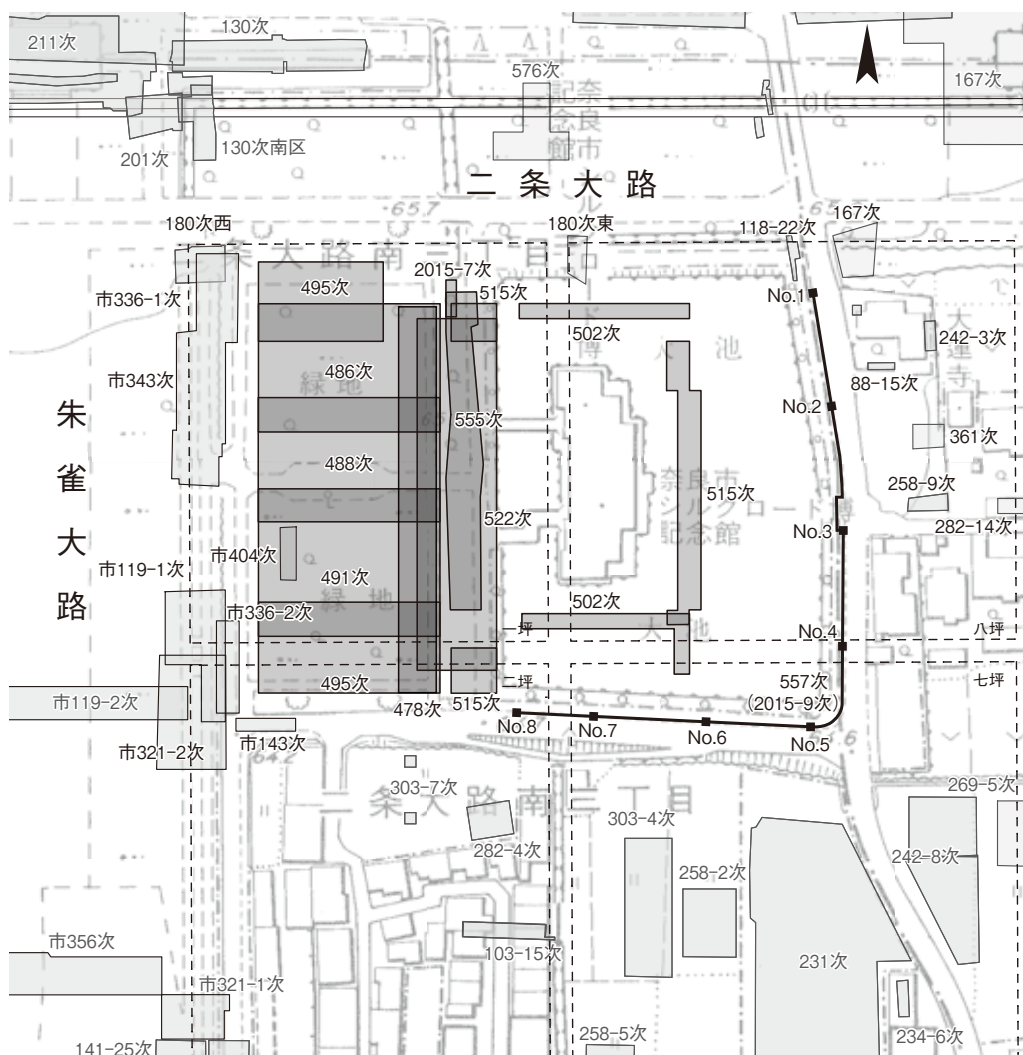


図 8 既調査区集成図 1:2000

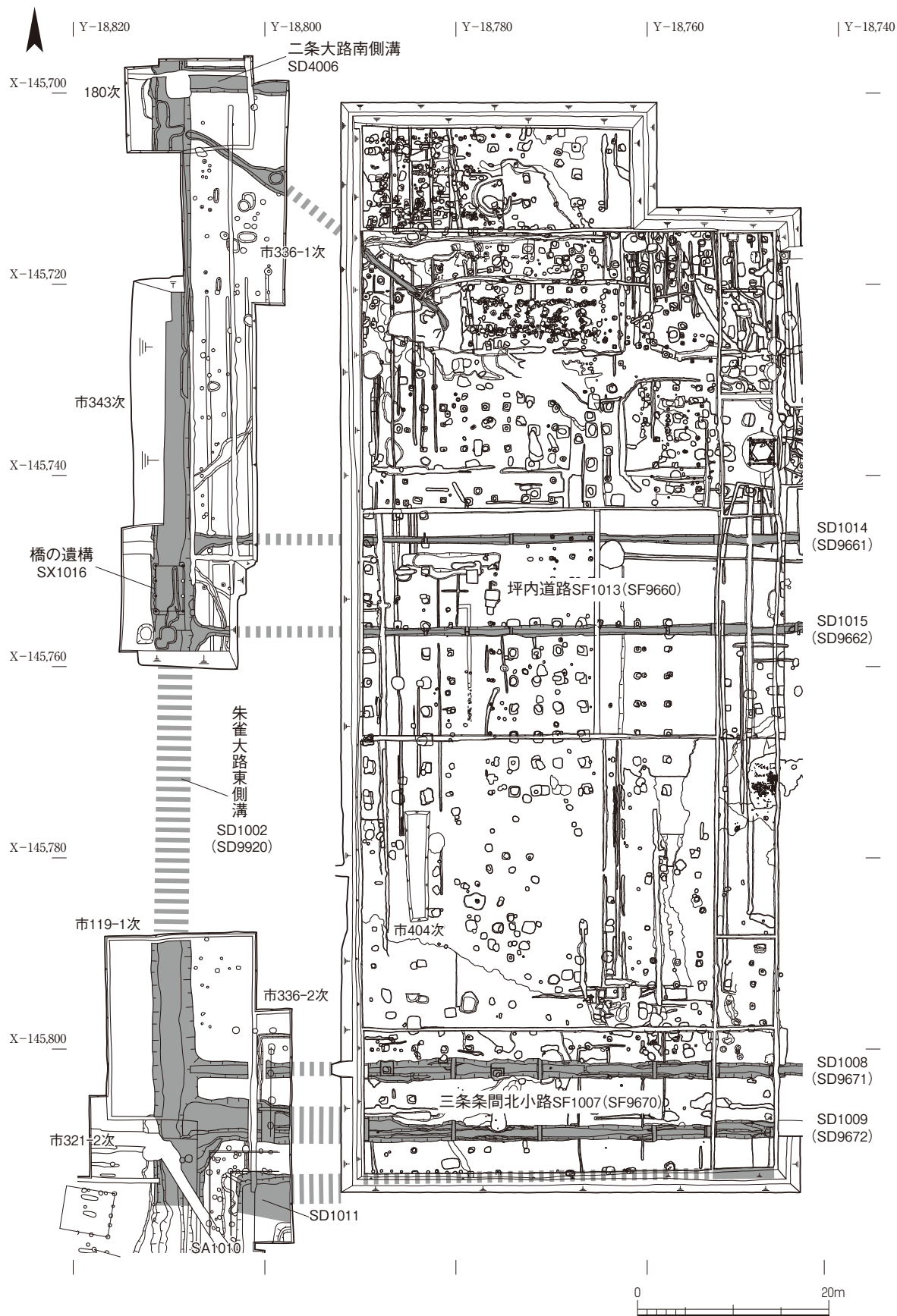


図9 市調査区と本調査区との合成略図 1:600

坪内道路北側溝SD1014は幅1.4m、深さ0.25m、南側溝SD1015は幅1.4m、深さ0.2mを測る。橋SX1016は桁行1間（3m）、梁行3間（4.8m）の規模である。

**市第404次** 一坪内に位置する小規模な調査区で、顕著な遺構は検出されなかった。

## 二 坪

**市第143次** 東西に長い調査区である。奈良時代の遺構は、土坑1基SK03および柱根のある柱穴1基、礎石据付穴2基がある。2つの礎石据付穴の心々間距離は3.6mあり、礎石据付穴から根石と平瓦片が出土した。このほか、古墳時代の土坑2基を検出した。

## 八 坪

**第88-15次** 住宅建設にともなう事前調査である。北新大池の東岸外側に調査区を設定したが、調査面積が17㎡と狭小のため遺構は検出されなかった。

**第118-22次** 市道拡幅計画にともなう事前調査である。北新大池東岸内側に南北方向の調査区を設定した。八坪北側で二条大路南側溝SD4006を検出、溝幅は3.5mで溝の堆積土には若干の木器片と多量の瓦片が含まれていた。

**第167次** 平城宮南面の壬生門西側の築地大垣および二条大路の学術調査である。同時に八坪北辺の状況を小面積の調査で確認した。二条大路南側溝SD4006は、溝幅5～6m、深さ1.3mを測る。溝底中央には東西に並ぶ杭列と板材があり、これは溝北岸の護岸施設と考えられる。この護岸施設は溝内堆積の下層にあたり、中・上層では溝幅が北に広がっていることがあきらかになった。溝内堆積からは、瓦のほか、下駄や人形などの木器が出土した。

SD4006の南側には八坪北辺を限る築地堀SA12510を検出した。基底部幅4mで、北側にはSD4006に重複する形で築地堀の北雨落溝SD12512と、堀の南側に南雨落溝SD12506を検出している。築地堀の南雨落溝からは軒瓦第Ⅲ期の軒平瓦6711Aが出土した。

**第180次東区** 八坪の西北隅にあたり、二条大路南側溝SD4006を検出した。溝幅は1.3～2.8m、深さは約0.9m、溝の堆積は上下2層あり、下層には多量の丸瓦、平瓦が含まれていた。

**第242-3次** 住宅建設にともなう事前調査である。調査区は八坪の東北部にあたる。奈良時代の南北掘立柱堀を検出した。

**第258-9次** 住宅建設にともなう事前調査である。調査区は北新大池の東岸外側に位置する。東西溝1条と土坑3基を検出した。東西溝は幅0.8～1.0m、深さは約0.5mで、溝内堆積土から瓦片が出土した。土坑2基は多量の炭片とともに平城宮Ⅲの土器が多く出土した。また、調査区東北隅で検出した土坑は、壁が垂直に落ちており井戸の可能性もある。この土坑は東西溝と重複し土坑が古い。

**第282-14次** 住宅建設にともなう事前調査である。調査地は八坪の東辺に位置する。東一坊坊間路SF7045とその西側溝SD7050を検出したが、八坪東辺を画する築地堀の痕跡は確認できなかった。SD7050は溝幅5.7m、深さ1.5mを測る。溝内堆積土からは瓦や土器が出土した。

**第361次** 住宅建設にともなう事前調査である。調査地は八坪の東半中央に位置する。柱穴1基、土坑3基、溝2条を検出した。土坑SK8751～8753は奈良時代の瓦を含む。斜行溝SD8754は柱穴と重複し斜行溝が古い。南北溝SD8755は奈良時代以前の自然流路と考えられる。

註

1) 奈良市教育委員会「第Ⅰ章・第Ⅱ章1」『史跡 平城京朱雀大路跡－発掘調査・整備事業報告－』1999年。



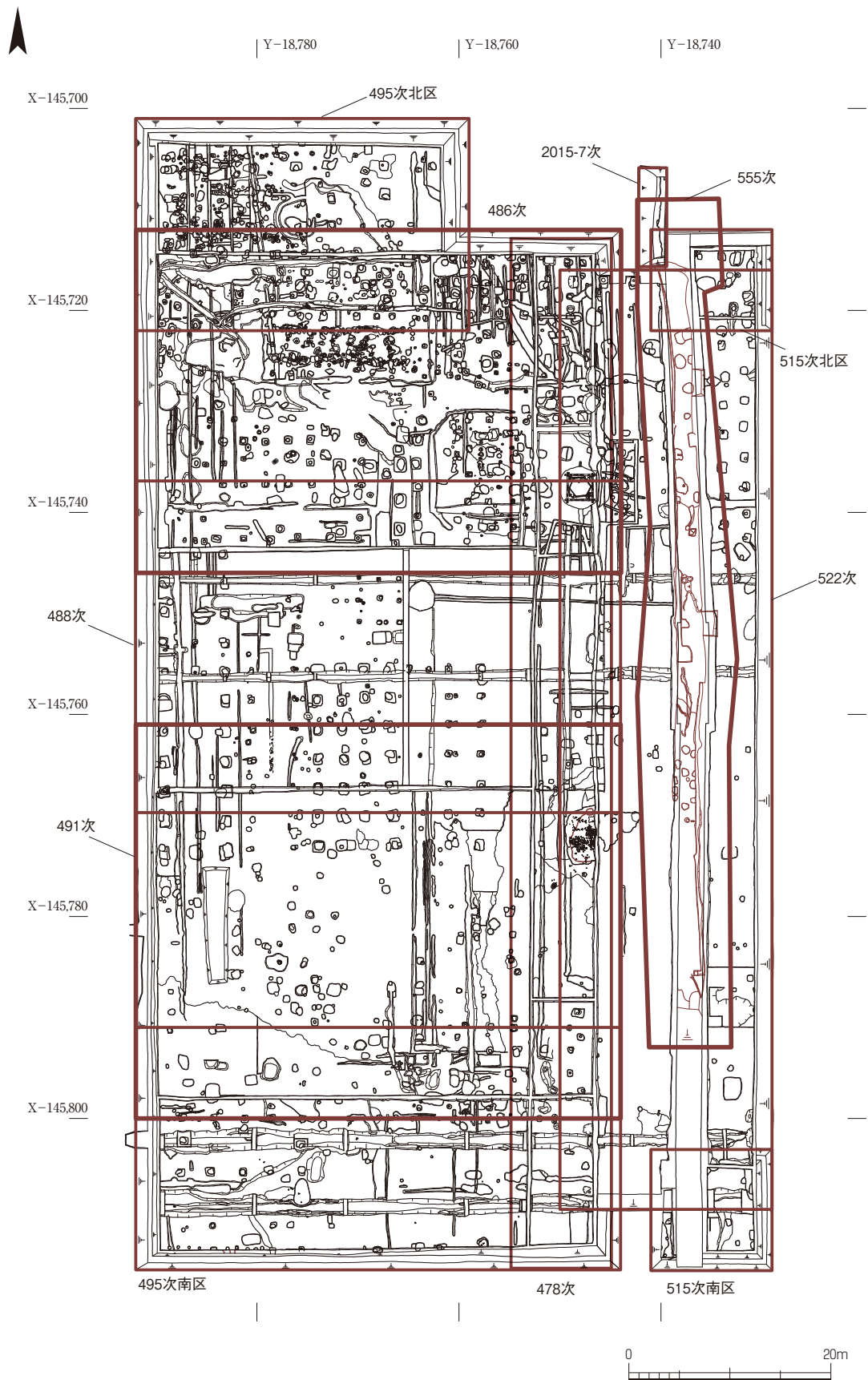


図10 一坪の遺構図と調査次数 1:600

### 3 調査概要

本調査地の一連の調査は平成22（2010）年12月に開始し、平成27（2015）年7月に終了した。今回報告する発掘調査の一覧を表2にした。以下、調査回数ごとに調査の概要を述べる（図10）。

#### A 第478次調査

左京三条一坊一坪内の遺構面の高さや遺構の残存状況を確認するための試掘調査として実施した。これまで未調査であった坪内東半の状況を把握するために、南北に長い調査区を設定した。奈良市が市第336・343次調査で確認した坪内道路SF9660（市SF1013）、三条条間北小路SF9670（市SF1007）の東の延長部分を検出することも想定した（図11、PL.4-1）。

朱雀大路緑地の整備盛土が約1.5mの厚さに達しており、その下には旧耕作土、水田耕作土、床土がつづき、奈良時代の遺構面に達する。調査区北半で奈良時代の井戸SE9650が良好な状態で検出されたほか、井戸の南に位置するL字形溝SD9651、井戸の南方には東西に走る坪内道路SF9660、坪内道路北側溝SD9661、同南側溝SD9662、調査区南端では三条条間北小路SF9670、北側溝SD9671、同南側溝SD9672、二坪北辺の築地塀にともなう南雨落溝SD9673を検出した。坪内道路と三条条間北小路の間には瓦溜SX9656とその下層に位置する古墳時代の土坑SK9657、時期不明の土坑SK9658等を検出した。

#### B 第486次調査

第478次の試掘調査成果にともづき、平城宮いざない館建設予定地の全面発掘を実施した初めての調査である。第478次調査区の北端から南へ34m分を調査区の南北長とし、第478次調査の東端を基点に西に拡張した調査区を設定した（図12、PL.4-2）。この調査では、奈良時代の整地層を挟んで2時期の遺構群があることが判明した。古い時期を平城宮・京造営期、新しい時期を鍛冶工房廃絶後とする。

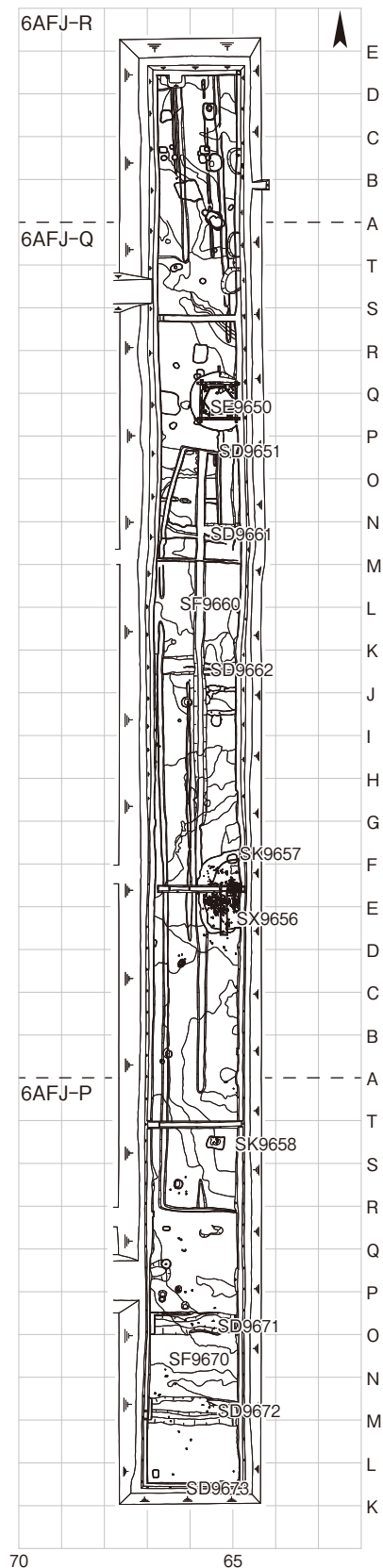


図11 第478次調査遺構図・地区割図  
1:500

表2 発掘調査一覧

次 数	年 度	調査地区	調査期間	面積 (㎡)
478	平成22 2010	6AFJ-P、6AFJ-Q、6AFJ-R	2010.12.08 ～ 2011.03.30	1,030
486	平成23 2011	6AFJ-Q、6AFJ-R	2011.09.28 ～ 2011.12.27	1,668
488	平成23 2011	6AFJ-Q	2011.12.22 ～ 2012.03.30	1,584
491	平成24 2012	6AFJ-P、6AFJ-Q	2012.04.02 ～ 2012.07.06	1,900
495	平成24 2012	6AFJ-P、6AFJ-R	2012.07.01 ～ 2012.10.12	1,845
502	平成24 2012	6AFJ-P、6AFJ-R	2012.12.03 ～ 2013.01.24	424
515	平成25 2013	6AFJ-P、6AFJ-Q、6AFJ-R	2013.05.16 ～ 2013.11.29	264
522	平成25 2013	6AFJ-P、6AFJ-Q、6AFJ-R	2013.12.16 ～ 2014.03.28	1,953
555	平成27 2015	6AFJ-P、6AFJ-Q、6AFJ-R	2015.07.08 ～ 2015.07.31	650
2015-7	平成27 2015	6AFJ-R	2015.06.10 ～ 2015.06.18	* 1
557	平成27 2015	6AFJ-P、6AFJ-Q、6AFJ-R	2015.07.03 ～ 2015.07.21	* 2

\* 1：立会調査 \* 2：立会第2015-9次調査

平城宮・京造営期には、鍛冶工房関連遺構が展開する。鍛冶工房SX9690・9830・9850、工房覆屋SB9880・9881・9882、鍛冶工房にともなう溝SD9878・9879・9883・9884・9885・9889、溝に敷設された堰SX9888、廃棄土坑SK9886・9887、そのほか、東西棟建物SB9877などがある。

工房廃絶後に全体を整地して造営した遺構群がある。第478次で検出した井戸SE9650周辺の精査をおこない、井戸の掘方や井戸屋形SB9890等を検出した。このほか、南北棟建物SB9892・9895・9896、東西棟建物9900、T字形堀SA9893、南北堀SA9897、L字形堀SA9898、東西堀SA9899・9901・9902等がある。工房廃絶後の遺構は建物配置や重複関係等の分析からさらに時期を細分できる。紀要2012に掲載した掘立柱建物SB9653・9894・9903は、その後の検討で建物ではないと判断し、本報告では遺構として取り上げなかった。

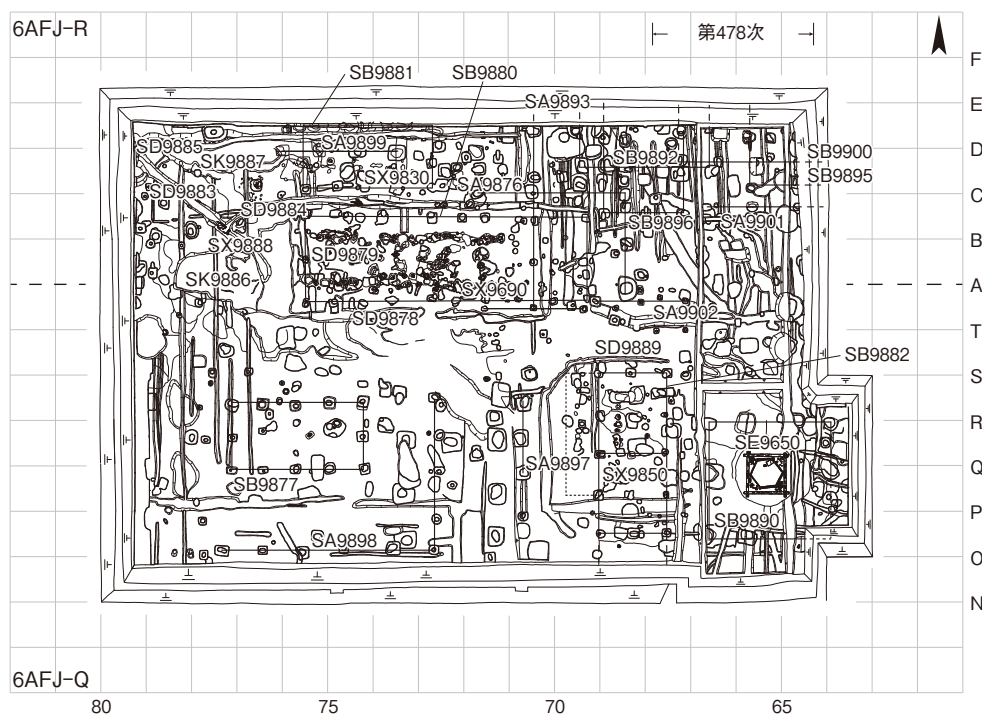


図12 第486次調査遺構図・地区割図 1:500

### C 第488次調査

第486次の南端に一部重ねて調査区を設定した（図13、PL.5-3）。調査区の東西幅は第486次調査区にそろえた。この調査区では、平城宮・京造営期の遺構を検出した。大規模な南北棟建物SB9999・10000・10010のほか、南北棟建物SB10005、総柱建物10025、L字形溝SD10020、南北棟建物SB9999の東側に位置する柱穴列SX10011、SB9999とSB10010の間を連結する東西堀SA10015、SB9999とSB10000の間に位置する柱穴列SX10016・10017、SB10000の西側に柱穴列SX10019等を検出した。紀要2013に掲載した調査区東端に位置するSB9995～9998は、その後の検討で建物や柱列等の建物ではないと判断した。同様に、SE10006、SK10007～10009も詳細不明のため、本報告では遺構として取り上げなかった。

### D 第491次調査

調査区は第488次の南に設定し東西は第488次調査区にそろえた（図14、PL.5-4）。この調査区では、工房廃絶後の整地層はみられず遺構はすべて地山面で検出した。調査区北半中央では南北棟建物SB9999およびSB10010の南半部、調査区東南隅では東西棟建物SB10045を検出した。このほか、土坑SK10050、南北溝SD10048などの遺構を確認した。

### E 第495次調査

北区と南区に分けて調査を実施した。北区は第486次調査区の北に設定し、鍛冶工房の北への広がりを確認するための調査をおこなった。調査区西端は第486次にあわせた（図15、PL.6-1）。

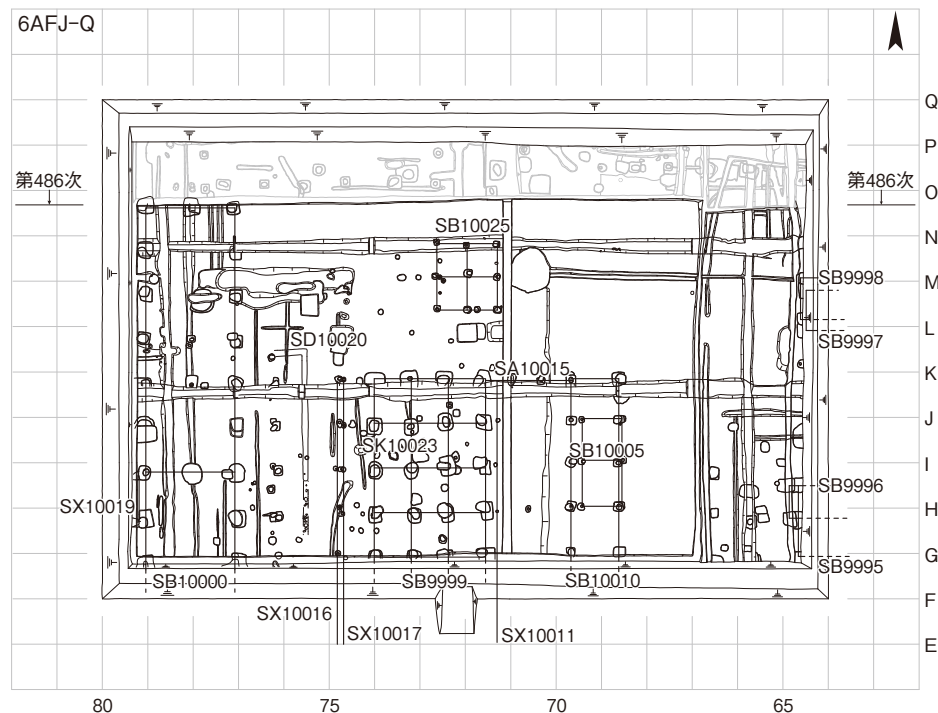


図13 第488次調査遺構図・地区割図 1:500



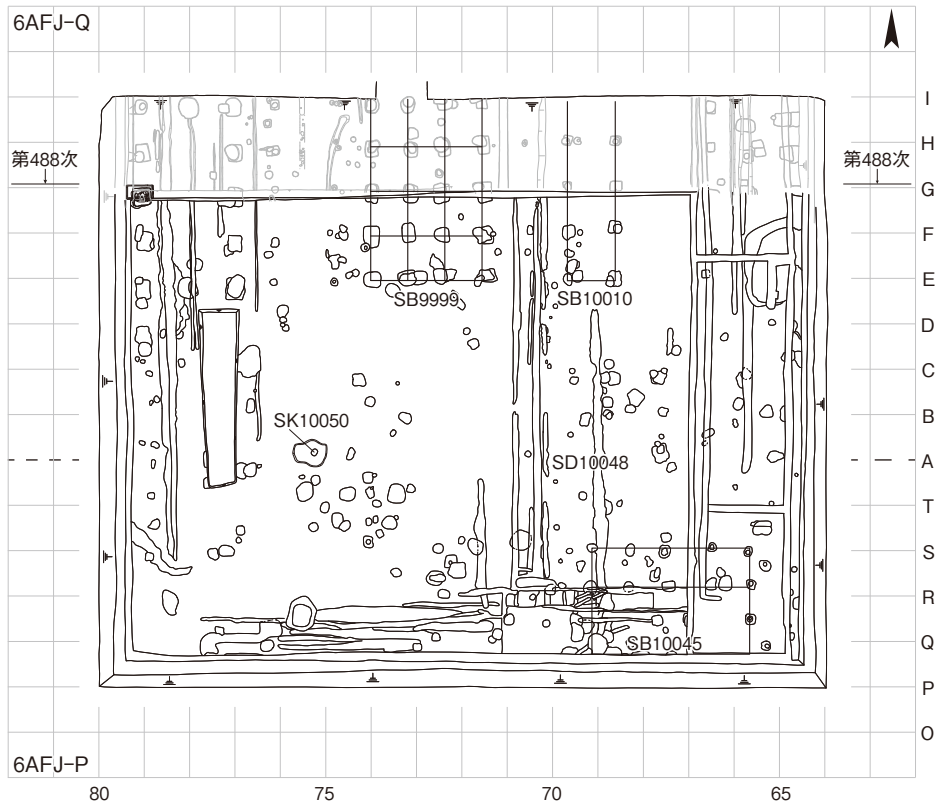


図14 第491次調査遺構図・地区割図 1:500

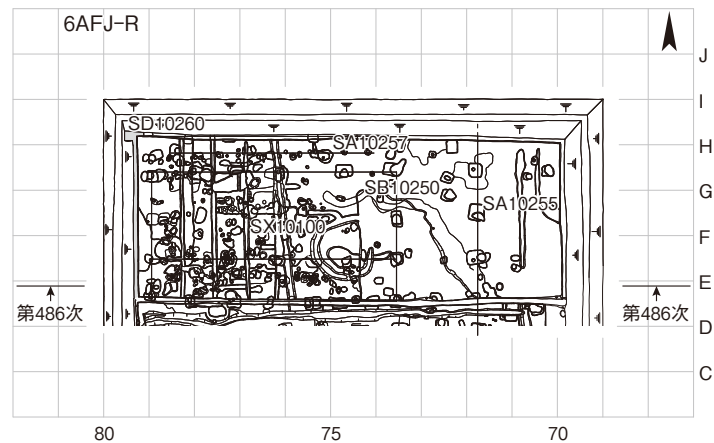


図15 第495次調査（北区）遺構図・地区割図 1:500

鍛冶工房SX10100のほか、鍛冶工房を覆う工房覆屋SB10250、鍛冶工房にともなう南北溝SD10260、南北塀SA10255、東西塀SA10257を検出した。

南区は第491次調査区の南端を一部重ねて設定した（図16、PL.6-2）。奈良市が検出した三条条間北小路の様相を確認することを目的とした。三条条間北小路SF9670とその北側溝SD9671、南側溝SD9672のほか、第491次調査で検出した東西棟建物SB10045の南半部分、三条条間北小路に重複する東西棟建物SB10075のほか、小穴列SX10080・10085等を検出した。

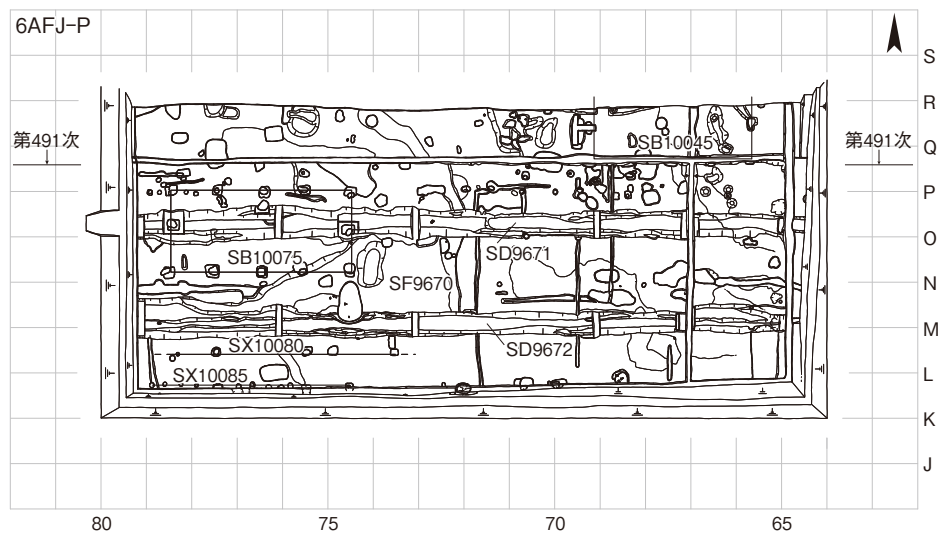


図16 第495次調査（南区）遺構図・地区割図 1:500

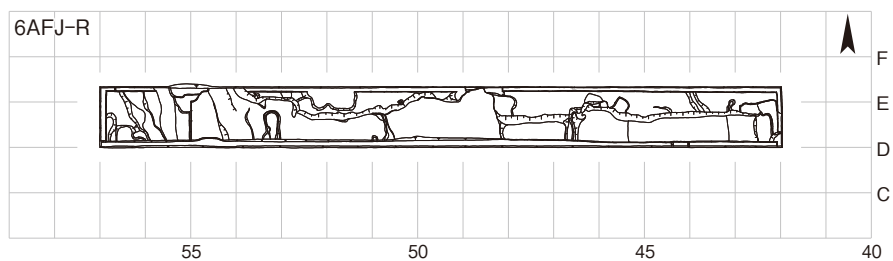


図17 第502次調査（北区）遺構図・地区割図 1:500

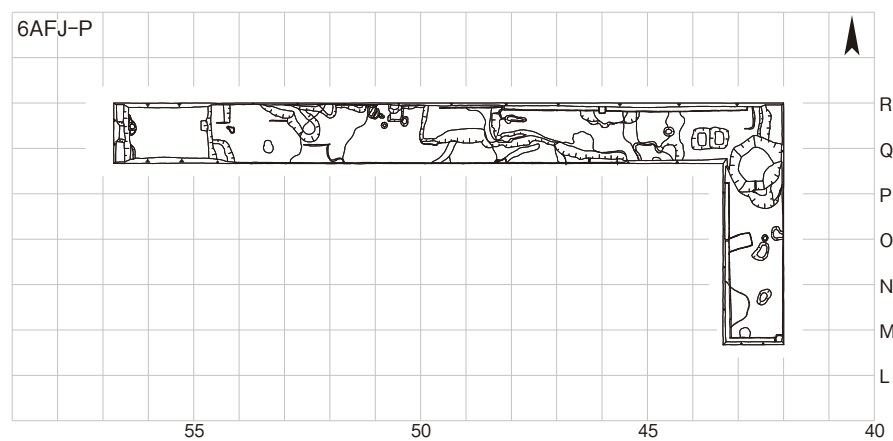


図18 第502次調査（南区）遺構図・地区割図 1:500

## F 第502次調査

調査区は左京三条一坊八坪の遺構が北新大池造営時に壊されていることを想定し、池底の遺構残存状況を把握するために設定した（図8）。八坪内の北と南に2つの調査区を設定した。北区は八坪内と坊間西小路の遺構がかかることを想定したが、北区の遺構面は、上述の各次数で検出した奈良時代遺構面よりも1 m低く、かつ池造成時の地盤改良剤が土壤に浸透し、顕著な遺構は確認できなかった（図17、PL. 7-3）。南区も北区と同様の状況であったが、古代の

遺物を含む土坑5基を検出し、北新大池の池底でも遺構が残存していることを確認した。ただし、これらの土坑の具体的な時期や性格は不明である（図18、PL.7-4）。

## G 第515次調査

奈良市シルクロード博記念館の建物解体に先立ち、建物周辺の遺構の残存状況を確認するために、北区、南区、東区を設定した（図8）。北区と南区の西半は、現代のボックスカルバートが設置されており、遺構検出は調査区の東半にとどまった（図19・20、PL.8-1、9-3・4）。北区では南北溝SD10410と東西棟建物SB10555、南区では三条条間北小路SF9670と南側溝SD9672のほか、古墳SZ10415とその周濠SD10416を検出した。東区は第502次調査区の間をつなぐように、北新大池の池底に南北に長い調査区を設定した（図21、PL.8-2）。奈良時代の遺構は残存していなかったが、弥生時代の東西溝SD10420・10421のほか、自然流路NR10422・10423を検出した。八坪内には、平城京造営以前の古墳時代や弥生時代の遺構が存在することがあきらかになった。

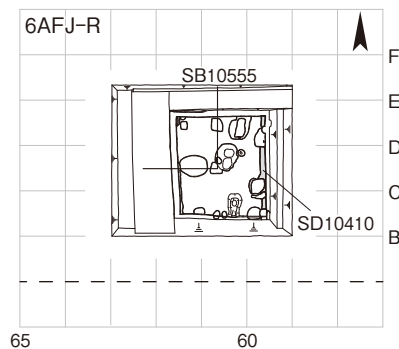


図19 第515次調査（北区）遺構図・地区割図 1:500

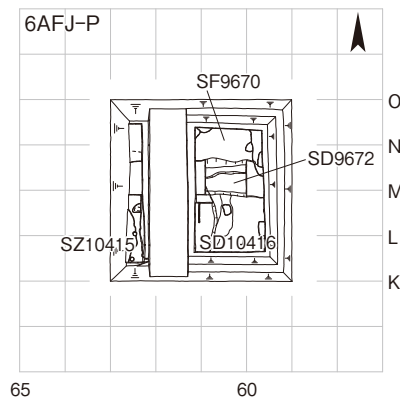


図20 第515次調査（南区）遺構図・地区割図 1:500

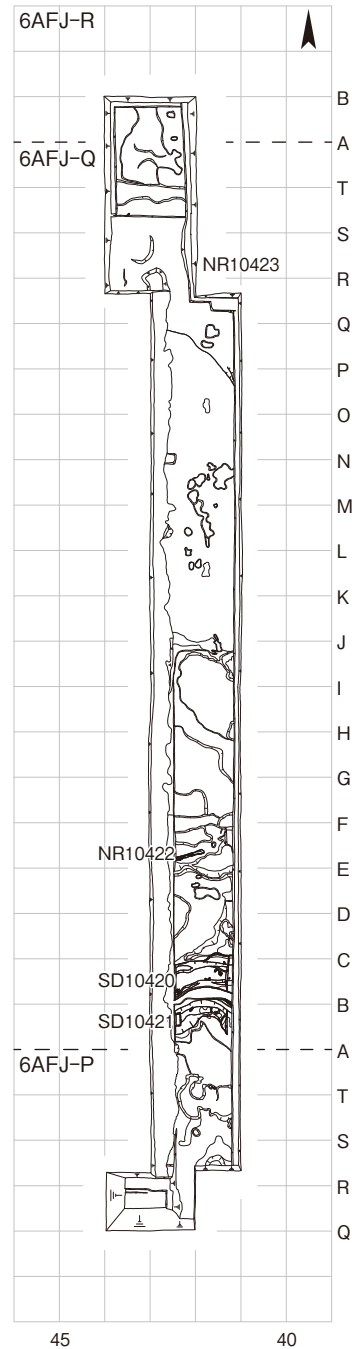


図21 第515次調査（東区）遺構図・地区割図 1:500

## H 第522次調査

奈良市シルクロード博記念館建物解体後、一坪東辺の未発掘部分の遺構残存状況を把握するために、第515次北区と南区の間をつなぐ南北に長い調査区を設定した(図8)。調査区中央には現代のボックスカルバートがあるために調査できなかったが、その両脇で遺構を確認した(図22、PL.10-1)。調査区北で東西棟建物SB10555、南北棟10560・10561、調査区中央では坪内道路SF9660と北側溝SD9661、南側溝SD9662、第478・491次調査で検出した瓦溜SX9656の東延長部分、調査区南端で、三条条間北小路SF9670、北側溝SD9671、東西流路NR10567等を検出した。

## I 第555次調査

第522次調査時に残存していたボックスカルバートを撤去後、未調査部分を発掘調査した(図23、PL.10-2)。奈良時代の整地層を2面確認したが、下層整地層を掘り込む柱穴以外に顕著な遺構は確認できなかった。

## J 立会第2015-7次調査

北新大池排水路付け替え工事にともなう事前調査。第555次調査区の北端に一部かかる調査区で、東西棟建物SB10555を一部検出した(図24、PL.11-3)。

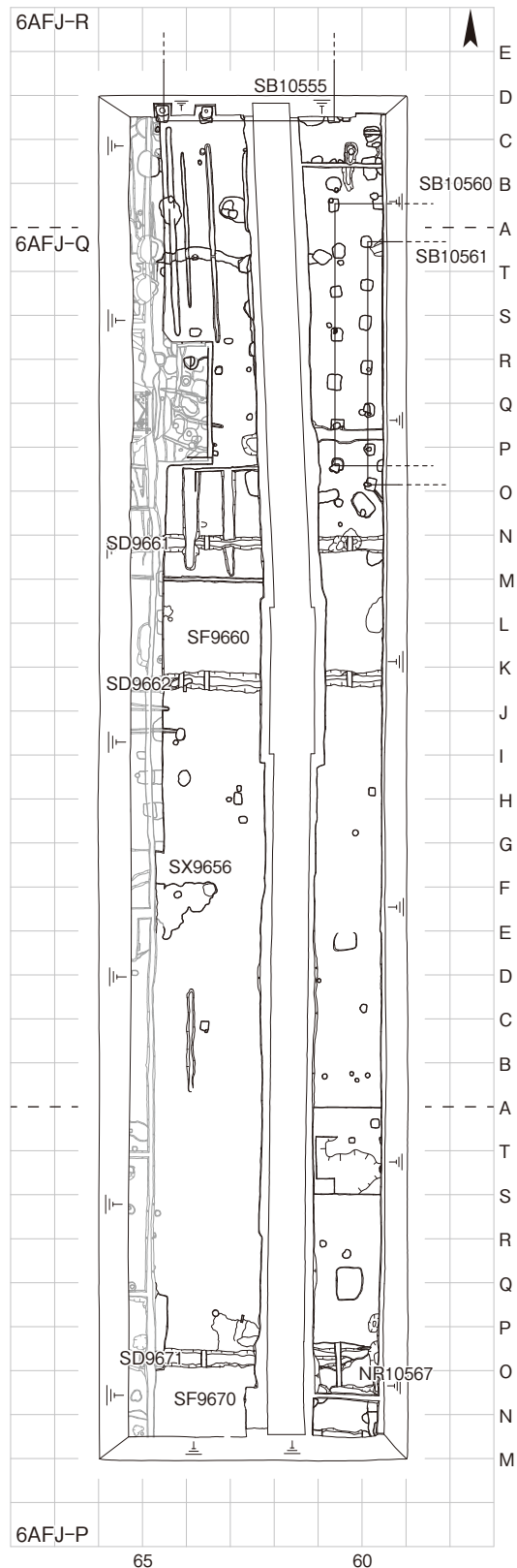


図22 第522次調査遺構図・地区割図 1:500



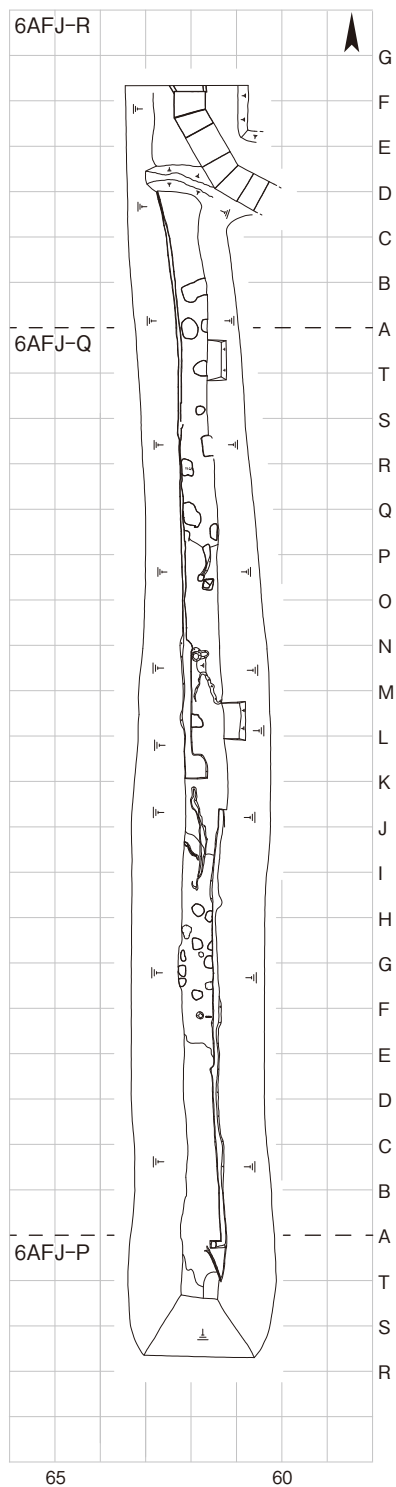


図23 第555次調査遺構図・地区割図  
1:500

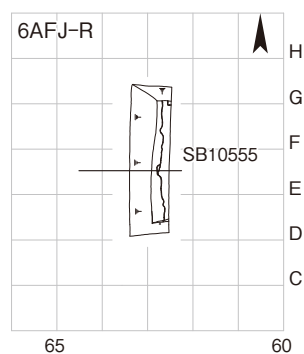


図24 第2015-7次調査遺構図・  
地区割図 1:500

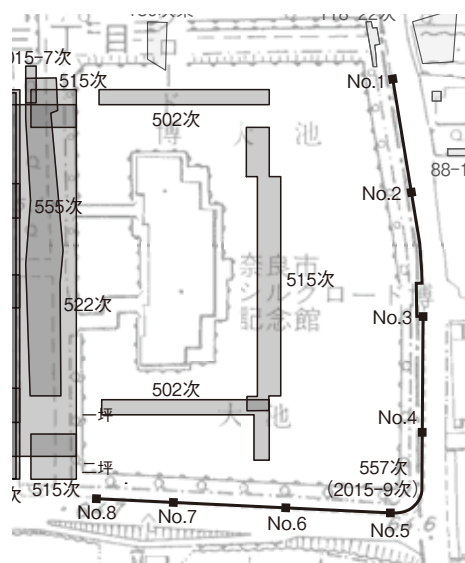


図25 第557次調査位置図 1:2000

### K 第557次調査（立会第2015-9次）

照明灯の移設にともなう事前調査。工事の立会で対応した。調査地は北新大池の南・東岸の堤上に位置する（図8）。埴輪片が少量出土した箇所があり遺構埋土の可能性があるものの、狭小な布掘り、壺掘り工事にともなう立会調査のため遺構は確認できなかった（図25、PL.11-4）。そのほかの工事掘削は現代盛土内におさまった。

## 4 調査日誌抄録

### A 第478次調査 平成22（2010）年12月8日～平成23（2011）年3月30日

- 12.20 調査区北端から重機掘削開始。地表から1.5m下まで整備盛土であることを確認。
- 12.27 床土下の黄褐色粘土層（平城宮・京造営期の整地土）で重機掘削を止める。年内の作業は終了。
- 1.5 重機掘削はQNラインまで終了。グリッド設定。遺構らしきものが見え始める。
- 1.6 作業員による遺構検出を調査区北端より開始。柱穴を確認。
- 1.11 QKラインの南で坪内道路南側溝SD9662を検出。
- 1.14 重機掘削終了。
- 1.17 QEライン付近で瓦溜SK9656、PMライン上で三条条間北小路SF9670の南側溝SD9672、POライン上で同北側溝SD9671を検出。溝幅は1.5～1.8m。
- 1.20 QNラインの南で北側溝SD9661を検出。
- 1.21 RB65、RC65で柱穴を検出。QP65で井戸SE9650の方形の上段井戸枠土居桁を確認。
- 1.24 QIライン以北で南北に並ぶ柱穴を検出。2基は柱根跡が明瞭。
- 1.26 遺構平面図の実測。
- 1.28 遺構面の標高を計測。
- 2.2 高所作業車、ヘリコプターによる遺構検出状況の全景写真撮影。
- 2.4 坪内道路北側溝SD9661・同南側溝SD9662の下層を掘り下げる。南側溝SD9662は2段掘りであることが判明。瓦溜SK9656の瓦を完掘し下層の土坑SK9657を検出。
- 2.7 各遺構の断割調査と図面作成。
- 2.8 井戸SE9650以外の遺構の断割調査は終了。
- 2.9 井戸SE9650上段井戸枠抜取の半截開始。抜取底部で下段井戸枠を検出。平面は六角形。
- 2.16 上段井戸枠抜取の半截状況を写真撮影。撮影後、抜取東半を掘り下げ開始。下段井戸枠上面に貼り付いた軒平瓦は東大寺式軒平瓦6732F、井戸は奈良時代後半以降に埋没か。
- 2.17 上段井戸枠抜取東半を掘り下げ。奈良時代後半の須恵器の完形に近いものが出土。
- 2.18 上段井戸枠抜取の完掘状況を写真撮影。
- 2.21 下段井戸枠内の埋土の西半の掘り下げ開始。「埋土A」とした。粘土で遺物少なく完形に近い土器や木器が数点出土。埋土はすべて現場で篩いにかけて微細な遺物を探すことにした。植物の種や虫の卵らしきものが見つかる。
- 2.22 井戸埋土を検出面より1.5mほど下げる。遺物は少なく埋土も変化なし。
- 2.23 井戸埋土を検出面より2mほどまで下げる。柄杓、刀子、櫛、和同開珎（新和同）、横瓶、壺Lなど出土。
- 2.24 井戸埋土の半截状況を写真撮影。井戸埋土の試料採取を実施。「六条四坊云々」を記した木簡を確認。
- 2.25 井戸埋土の東半部分の掘り下げ開始。「埋土A1」、「埋土A2」として遺物取り上げ。
- 3.1 「埋土A3」を掘り下げると、わらじ、甕などが出土。
- 3.2 「埋土A3」より下を「埋土B」として掘り下げたところ、下段井戸枠横板を上から数えて7段目で井戸底になることが判明。埋土最下層は明青灰色粘土であり「埋土C」として取り上げる。
- 3.3 （株）古環境研究所（現 文化財科学研究センター）が「埋土C」の土を試料採取。午前10時から現場で報道発表。「埋土」に木の削りくずが出土していることから埋土を全て研究所に持ち帰り整理室で洗うこととした。
- 3.4 井戸埋土掘り下げ継続。東半の「埋土B」で土器、木製品、瓦などが多く出土。調査区の東壁土層図は終了。調査区西壁土層図の作成開始。
- 3.8 井戸埋土の掘削終了。井戸底は砂で井戸枠内側の支柱は砂面直上に据えてある。
- 3.9 井戸完掘状況の写真撮影。
- 3.10 井戸の掘方を検出。調査区西壁土層図作成。
- 3.14 井戸の3D測量を実施。
- 3.15 重機による埋戻し開始。井戸枠内側には厚4mmの不織布をかけ井戸枠崩壊を防ぐため単管で枠間を支え土嚢で充填。16日に充填終了。
- 3.22 井戸周辺を残し他は埋戻し終了。
- 3.28 次年度再調査のため軽量材発泡スチロールで井戸周囲の埋戻し開始、29日終了。
- 3.30 すべての埋戻し作業完了。撤収。

## B 第486次調査

平成23（2011）年9月28日～12月27日

- 9.28 重機掘削開始。
- 10.4 黄灰土（水田耕作土・床土）上面で重機掘削を止める。黄灰土層の下で遺構面を確認。
- 10.6 グリッド設定。QN79～78の調査区南西隅に木枠で囲った野井戸らしきものを検出。
- 10.12 柱穴等の遺構が見え始める。
- 10.18 井戸SE9650東側拡張区の遺構検出完了。調査区南側では鍛冶工房廃絶後の整地土が広がる。67～68ライン付近の平城宮・京造営期の整地土面で柱穴・溝などを検出。
- 10.19 68～69ラインで炭を多く含む溝や柱穴などを検出。調査区北半では凝灰岩の細片が瓦・土器とともに出土。
- 10.20 調査区北半で炭、韃の羽口、鉄鐸が出土。調査区南半では大きな柱穴を検出。
- 10.21 調査区北半では灰がつまった遺物包含層が広がる。鉄鐸、韃、須恵器、甕、壺が多い。鍛冶工房SX9690・9830の様相が明確になる。
- 10.24 調査区北半で柱穴数基、調査区南半では粗砂の面で4×2間の東西棟建物SB9877を検出。
- 10.26 調査区北西の炭混じりの斜行溝SD9883、東西溝SD9884・9885は土層観察畦を残しながら掘り下げる。
- 10.27 調査区北半のQT～RB76～78の炭を含む廃棄土坑SK9886を検出。土層観察畦を残して掘り下げる。「工房排土」として遺物を取り上げ。斜行溝SD9883、東西溝SD9884・9885から鉄滓、韃羽口等が多数出土。
- 10.31 斜行溝SD9883と東西溝SD9884の合流地点で枡状の堰SX9888を検出。
- 11.1 廃棄土坑SK9886を掘り下げ、埋土は土嚢に詰めて研究所に持ち帰る。QT73～75で炉跡を複数確認。
- 11.2 調査区北半部の細部写真撮影。炉跡周辺の土も研究所に持ち帰る。1mグリッドを設定して遺物を取り上げることにする。
- 11.4 RA71～72ラインと73～74ライン付近で炉跡検出。RC76～77の廃棄土坑SK9887は上層を東西溝2で掘り下げる。中間層は無遺物の層との互層になっており76ライン近くで土層観察畦を残して掘り下げる。床面付近の漆黒の炭層は「土坑炭層」として取り上げ。
- 11.7 鍛冶工房エリアの精査。東西溝SD9885は完掘。
- 11.8 RA74～75炉跡など断ち割り。写真撮影と図面作成。RCライン73～75で炉跡、RB～RD67～70で柱穴を検出。
- 11.10 鍛冶工房を覆う掘立柱を確認。RC67～69の大きな窪みを完掘すると自然流路と柱穴を確認。
- 11.14 鍛冶工房SX9690の遺構を断割調査。第478次調査で埋戻した井戸SE9650の中の土嚢の除去を開始。調査区南側で2×4間の南北棟検出。
- 11.23 鍛冶工房SX9850を精査。
- 11.25 遺構検出状況の全景写真撮影。
- 11.28 各遺構細部の写真撮影。
- 11.29 鍛冶工房SX9690の炉、土坑を掘り下げる。遺構平面図の実測開始。
- 11.30 各遺構の断割調査開始。
- 12.2 鍛冶工房SX9690を掘り下げる。実測。柱穴の断割調査。
- 12.6 井戸屋形SB9890の柱穴を断割調査。
- 12.7 遺構平面図実測。
- 12.9 遺構平面図実測、標高計測。
- 12.12 井戸SE9650掘方の断割調査を開始。自然流路が2条交錯。遺構平面図作成。
- 12.13 井戸SE9650掘方の断割状況の写真撮影。断割調査の図面作成。
- 12.14 井戸SE9650の上段井戸枠土居桁を取り上げ開始。井戸SE9650掘方には遺物を含み土居桁の下にも礫がある。礫敷→土居桁の順に設置か。調査区南半の土層注記終了。
- 12.15 鍛冶工房の断割調査の図面作成。井戸SE9650掘方の断割調査継続。花粉分析の試料採取。
- 12.19 井戸SE9650下段井戸枠の取り上げ。写真撮影。下段井戸枠の支柱を取り上げる。
- 12.20 下段井戸枠取り上げ終了。
- 12.22 埋戻し開始。
- 12.27 埋戻し終了。



図26 第478次調査区との重複部分に埋めた軽量材発砲スチロールの再検出



## C 第488次調査

平成23（2011）年12月22日～平成24（2012）年3月30日

- 12.22 調査区縄張り、重機掘削開始。  
12.27 年内調査終了。  
1.5 新年調査開始。  
1.10 床土まで重機掘削。  
1.12 第486次調査区の埋戻し終了。  
1.16 76～77ラインで床土直下から柱穴列と坪内道路SF9660、その北側溝SD9661、南側溝SD9662を検出。  
1.18 重機掘削は完了。  
1.20 坪内道路の南側溝SD9662以南で柱穴を複数確認。  
1.23 遺構を精査。77～79、QG～QH間に南北棟建物SB10000の柱穴が並ぶ。76ライン上にSB10000の東廂の柱穴を確認。  
1.24 QG72、73で南北棟建物SB9999を検出。  
1.25 床土下層を掘り下げる。  
1.26 71ラインより西側で遺構検出。  
1.27 QJ～QKラインに坪内道路SF9660に先行する南北棟建物SB9999の柱穴を2列確認。  
1.31 QG～QK、68～70の地山面で南北棟建物SB10005・10010の柱穴を確認。  
2.1 QH～QKラインの灰色土を掘り下げる。瓦、須恵器、鉄滓片など出土。  
2.9 遺構検出継続。  
2.15 遺構検出継続。  
2.16 71～73ライン間QKより南では柱穴が重複。坪内道路北側溝SD9661の掘削開始。QL～QMで総柱建物SB10025を検出。  
2.17 南北棟建物SB9999は桁行4間以上、梁行3間の総柱建物と判明。  
2.21 75～80ライン間の南北棟建物SB10000は坪内道路SF9660および南北両側溝SD9661・9662より古いことが判明。南側溝SD9662の埋土中より軒丸瓦や施釉の須恵器片出土。  
2.24 南北棟建物SB9999および坪内道路の南側溝SD9662の検出終了。北側溝SD9661の掘削開始。  
2.28 南側溝SD9662は完掘。南側溝が炭層（鍛冶工房廃絶後の整地土）上に掘削している。北側溝も同様。  
3.7 午前10時から報道発表。  
3.10 午後1時半より現地説明会。850人来場。  
3.12 遺構平面図作成。  
3.13 第491次調査区の重機掘削開始。  
3.14 遺構平面図の作成。西側から遺構面の標高計測開始。  
3.15 遺構平面図完成。土層断面図作成。  
3.16 遺構平面図の標高計測完了。調査区西壁土層図は完了。  
3.19 調査区四面の壁土層図完了。  
3.21 土層注記完了。  
3.22 南北棟建物SB10000の柱穴断割調査完了。南北棟建物SB10005・10010と総柱建物SB10025の柱穴断割調査開始。環境考古学研究室の山崎研究員と（株）古環境研究所（現文化財科学研究センター）が坪内道路北側溝SD9661、南側溝SD9662の埋土の土壤試料採取を実施。  
3.26 総柱建物SB10025の作業完了。南北棟建物SB9999の柱穴断ち割り開始。  
3.27 南北棟建物SB10000の柱が柱掘方の底を突き抜けて地山面に沈下している。南北棟建物SB10005・10010の柱穴断割調査、土層注記、写真終了。  
3.28 柱穴断割調査の写真撮影。南北棟建物SB9999の柱穴断割調査完了。南北棟建物SB10000の柱穴の柱根の写真撮影。南北棟建物SB10010の柱穴抜取穴直下から礎板が出土。  
3.29 砂まき開始。第491次調査区の重機掘削は終了。第488次調査で検出した鍛冶工房SX9850の南端も調査区南側へは広がらないことを確認。  
3.30 調査区の埋戻し開始。遺構面の砂まき終了。



図27 第488次調査の現地説明会の様子



図28 南北溝SD9662埋土の土壤試料採取後

## D 第491次調査

平成24（2012）年4月2日～7月6日

- 3.26 第488次調査の現場に合流。南北棟建物SB10000の柱根が沈下して地山に沈み込む。遺構面は西から東に向かって砂質から粘土質へと漸次的に変化。南北棟建物SB10000付近の検出面から出土する軒瓦は藤原・大官大寺式（朱雀門などが由来か）である。
- 4.2 第491次調査区の重機掘削開始と同時に第488次調査区の埋戻しを並行して実施。
- 4.9 第488次調査区の埋戻し完了。
- 4.19 重機掘削継続。
- 4.23 南北棟建物SB10000のつづきの柱穴検出。
- 5.7 遺構検出。
- 5.11 南北棟建物SB10010のつづきを確認。
- 5.16 第478次調査区の再検出開始。東西棟建物SB10045の柱穴を確認。
- 5.21 南北棟建物SB9999を検出。西側だけで2×2間の可能性も。
- 5.24 遺構平面図実測開始。
- 5.29 遺構検出状況の全景写真撮影。
- 5.30 高所作業車による写真撮影（31日も継続）
- 6.1 遺構平面図実測。遺構の断割調査開始。
- 6.7 平面図作成と断割調査を実施。
- 6.8 東西棟建物SB10045の柱穴断割調査開始。廂は浅いが、身舎の柱穴は深い。
- 6.12 部員検討会。
- 6.13 南北棟建物SB10000の南隅の柱穴2基を断割調査。南筋の柱は柱穴掘方の北辺沿いに柱を据える。南北棟建物SB10000西側列の柱穴の断割調査で柱根と根巻石を検出。平面図標高計測終了。調査区南壁土層図開始。
- 6.15 調査区南壁土層図作成。東西棟建物SB10045の西妻柱の柱根を取り上げる。
- 6.18 断割調査・柱根取上・埋戻し。南北棟建物SB10000の西側柱穴の部材③・柱根を取り上げる。調査区西壁の土層図注記開始。
- 6.20 平面図実測終了。土坑SK10050の出土遺物を土ごと固めて取り上げる。
- 6.21 午前、報道発表。
- 6.23 現地説明会午後1時半～。来場者数652人。
- 6.25 砂まき・埋戻し。調査区南壁土層図注記。第495次北区の重機掘削開始。
- 6.26 調査区南壁土層図注記終了。
- 6.27 埋戻し継続。第495次北区掘削・撤収作業。土坑SK10050の出土遺物を室内で調査したところ地鎮具の可能性大。
- 7.2 本日より総担当引継。第491次調査は埋戻しを継続。

## E 第495次調査

平成24（2012）年7月1日～10月12日

- 7.3 北区の重機掘削と第491次調査区の埋戻しを実施。
- 7.4 北区は南北溝SD10260の検出面で重機掘削を停止。第491次調査区の埋戻しは完了。
- 7.5 北区西辺でSD10260を確認。土器片・瓦片・韃羽口片が出土。
- 7.6 北区北壁で東西塀SA10256の柱穴を2基確認。調査区西辺のSD10260は北にのびる。調査区北辺で円筒埴輪片が出土。
- 7.9 重機掘削継続。北区北壁で東西塀SA10256の続きを確認。
- 7.10 北区の重機掘削は完了。作業員による掘削を開始。RE78で径15cmほどの被熱部の炉跡を検出。北区の西壁・東壁は土層図を作成開始。
- 7.11 RE78・RF78で炉跡を各1基と、それと組み合わせる炭入りの土坑を検出。RG78では炭混じりの土坑を5基検出。南区の重機掘削開始。
- 7.13 北区77ライン西寄りで炉を1基、炭がつまった土坑を多数検出。RG77やRE77等で炭集中箇所を確認。土器・瓦・鉄滓・韃羽口が出土。
- 7.17 北区76ラインで炉を6基と多数の土坑を検出。75ラインでも4基の炉と多数の工房関連土坑を検出。炉跡はRE～RG76、RE75に集中する。
- 7.18 北区のRD74では炉跡や土坑を検出。RG73・74で柱穴を検出。
- 7.19 72ラインでは南北塀SA10255を検出。
- 7.20 73ライン西寄りで南北軸の柱根を検出。南北塀SA10255の柱穴3基は柱根が残存。
- 7.23 73ライン以西の遺物包含層を除去して炉跡や土坑、柱穴を検出。遺物包含層から土器片・瓦片・鉄滓・韃羽口等が出土。
- 7.24 工房覆屋SB10250の北側柱の柱穴を検出。
- 7.25 北調査区で南調査区の南西隅を中心に金床の位置や韃座の位置が判明。南調査区

- で遺構検出開始。
- 7.26 南調査区西北隅の土坑をいくつか掘り下げる。土坑内の土は篩がけのため研究所に持ち帰る。南調査区は遺構検出継続。
- 7.30 北調査区は、土坑、炉跡、竈座等を掘り下げる。遺構内の土は試料採取する。南調査区では、三条条間北小路の北側溝SD9671と南側溝SD9672を検出。
- 8.1 南調査区では三条条間北小路北側溝SD9671内で東西棟建物SB10075の柱穴を検出。
- 8.6 南調査区は南側溝SD9672の検出。
- 8.16 南調査区で南側溝SD9672と北側溝SD9671の南北両肩を確認。
- 8.21 南調査区はPPライン周辺で多数の穴を検出。
- 8.22 南調査区では北側溝SD9671から墨書のあ  
る坏蓋が出土。
- 8.27 南調査区では、東西棟建物SB10075の南側柱の柱穴を3間分確認。
- 8.28 南調査区で東西棟建物SB10075は4間×2間の建物と判明。南側溝SD9672は78ラインから西側で幅2.5mほどになる。
- 8.30 北調査区、南調査区とも写真撮影のための清掃。
- 9.6 ヘリコプターと高所作業者による遺構検出状況の全景写真撮影。
- 9.7 高所作業車による撮影と鍛冶炉の細部写真撮影。
- 9.10 北調査区と南調査区の遺構平面図作成開始。三条条間北小路の北側溝SD9671と南側溝SD9672の掘削開始。
- 9.11 南調査区の北側溝SD9671から瓦片、土馬1点等が出土。南側溝SD9672からは木片や紐等の有機物が出土。
- 9.13 午前、報道発表。
- 9.15 午後、現地説明会。653人来場。
- 9.21 北調査区は遺構平面図作成完了。南調査区はSD9671・SD9672完掘後の写真撮影。
- 9.26 北調査区の工房覆屋SB10250は東西6間、南北2間の母屋に南廂がつく構造と判明する。
- 9.27 北調査区の工房覆屋SB10250周辺の写真撮影後、砂まき開始。
- 9.28 南調査区は砂まき完了。
- 10.1 南調査区は埋戻し開始。
- 10.4 北調査区は埋戻し開始。
- 10.10 南調査区は埋戻し完了。
- 10.12 北調査区は埋戻し完了。
- 10.16 敷地全体の整地。調査終了。

## F 第502次調査 平成24（2012）年12月3日～平成25（2013）年1月24日

- 12.3 重機掘削開始。
- 12.6 グリッド設置。
- 12.10 溝検出。
- 12.12 東一坊坊間西小路はなし。
- 12.18 溝掘削、穴などを検出。
- 12.19 遺構検出状況の写真撮影。
- 12.20 平面図作成。
- 12.21 北区は砂まき後埋戻し開始。南区は試掘開始。
- 12.25 南区は重機掘削開始。
- 12.26 北区は埋戻し完了。
- 12.27 南区重機掘削継続。年内調査終了。
- 1.8 年初調査開始。南区重機掘削継続。
- 1.11 穴を検出。
- 1.12 重機掘削終了。撮影のための清掃。
- 1.13 遺構検出状況の全景写真撮影。
- 1.17 遺構平面図作成。
- 1.18 土層図作成。
- 1.21 遺構の断割調査開始。
- 1.23 土層の試料採取。埋戻し開始。
- 1.24 埋戻し完了。



図29 第495次調査報道発表時の様子



図30 遺構検出状況の写真撮影（第502次）



## G 第515次調査

平成25（2013）年5月16日～11月29日

- 5.16 北調査区の重機掘削開始。
- 5.20 北調査区は遺構面を検出。柱穴を3基確認。調査区東壁・南壁の土層図は完成。南調査区は重機掘削を開始。
- 5.22 北調査区の遺構の写真撮影。遺構平面図作成開始。
- 5.23 北調査区の平面図実測完了。断割調査開始。南調査区の重機掘削完了。東壁土層図作成開始。南調査区西側で埴輪がまとまる箇所あり。
- 5.24 南調査区で三条条間北小路南側溝SD9672を検出。南側溝に壊される形で埴輪を多く含む古墳の周濠SD10416を検出。
- 5.27 北調査区の調査終了。南調査区古墳周濠SD10416の内縁を検出。
- 5.28 北調査区の埋戻し完了。南調査区は写真撮影。三条条間北小路南側溝SD9672を掘り下げる。古墳の周濠SD10416を掘り下げると須恵器、埴輪が出土。
- 5.30 南調査区西側は埋戻し開始。
- 5.31 南調査区東半の完掘状況を写真撮影。その後、砂撒き、埋戻し完了。
- 11.1 東調査区の縄張り。
- 11.5 重機掘削開始。
- 11.7 調査区北壁土層図作成開始。
- 11.11 調査区南側より遺構検出。検出面は地山および弥生時代の堆積土上面。東西溝SD10420・10421を検出。弥生土器出土。
- 11.12 調査区東壁土層図作成開始。
- 11.13 東西溝SD10420・10421の写真撮影。自然流路NR10422を検出。
- 11.14 調査区全景写真撮影。東西溝SD10421の「黒色粘質土」を掘り下げる。遺構平面図実測。
- 11.19 東西溝SD10421完掘。板状の木が出土。東西溝SD10420を掘り下げる。溝の北肩に土器・木片が多い。
- 11.20 QI以北に砂まき開始。東西溝SD10420の「黒色粘質土」、「灰色細砂」、「黒色粗砂」の土を試料採取。調査区東壁土層図作成終了。
- 11.21 砂まき開始。東西溝SD10421の「黒色粘質土」「灰色粗砂」も試料採取。遺構図、土層図作成完成。
- 11.22 埋戻し開始。
- 11.28 調査終了。

## H 第522次調査

平成25（2013）12月16日～平成26（2014）3月28日

- 12.10 縄張り、レベル移動。
- 12.16 重機掘削開始。
- 12.18 作業員による手掘り掘削開始。
- 12.26 重機掘削継続。年内作業終了。
- 1.7 年初調査開始。重機掘削継続。
- 1.10 遺構検出開始。調査区南端近くに柱穴や自然流路あり。
- 1.14 南北方向の柱穴列、坪内道路北側溝SD9661を検出。
- 1.16 ボックスカルバート掘方の西壁に柱穴4基ほどあり。坪内道路南側溝SD9662を検出。
- 1.23 柱穴列や蛇行溝を検出。
- 1.27 坪内道路南側溝SD9662を再検出。
- 1.29 瓦溜SX9656を検出。柱穴が見つかるも建物としてまとめるのは困難。
- 1.31 三条条間北小路北側溝SD9671を検出。
- 2.3 三条条間北小路北側溝SD9671の掘削開始。瓦溜SX9656の瓦を取り上げる。SD9671の掘削開始。
- 2.4 坪内道路南側溝SD9662の掘削開始。



図31 瓦溜SX9656検出作業風景（第522次）



図32 高所作業車による撮影風景（第522次）



- 2.5 坪内道路北側溝SD9661を完掘。
- 2.10 東西棟建物SB9900は桁行6間と確定。
- 2.12 調査区西半北端から清掃。遺構平面図作成開始。
- 2.18 高所作業車による全景写真撮影。
- 2.19 クレーンによる全景写真撮影。
- 2.20 遺構平面図実測。
- 2.24 調査区東壁土層図の注記。
- 2.26 午前、報道発表。
- 2.28 鍛冶工房廃絶後の整地土追跡のためQN63・QO63に南北サブトレンチ2本設定（東が1、西が2）。QN62～64に東西サブトレも1本設定。
- 3.3 調査区の埋戻し開始。鍛冶工房廃絶後の整地土追跡作業続行。南北サブトレンチ1・2（南に延伸）&東西サブトレンチ2本掘削。完了後、全体写真取り直して鍛冶工房廃絶後の整地土の取上げ。
- 3.7 QT59およびRA60の柱穴断割調査。RC63・RC64とも南北に断ち割る。
- 3.10 RA62・63にまたがる土坑を十字に断ち割る。QP60柱穴の断割調査。
- 3.11 QQ59柱穴、QP60柱穴の断割調査。
- 3.15 埋戻し開始。
- 3.27 重機埋戻し完了。
- 3.28 調査終了。

## I 第555次調査 平成27（2015）7月8日～7月31日

- 6.30 ボックスカルバート撤去終了。工事業者による重機掘削に工事立会に対応。工事範囲の南端で斜行溝と東西溝を検出。
- 7.2 業者による重機掘削継続。柱穴を確認。
- 7.3 調査区の南25m分の遺構検出、撮影、平面図を終了。
- 7.8 本日より工事立会から発掘調査に切り替える。調査区北半部の遺構検出。
- 7.13 調査区北半の柱穴は径1.4mほどもあり、複数が重複する。
- 7.14 調査区北半の検出状況の写真撮影。
- 7.15 調査区北半の平面図作成。
- 7.21 遺構の断割調査と図面作成。
- 7.22 調査区北半の土層図終了。砂まき終了。
- 7.23 調査区北半の埋戻し開始。
- 7.24 調査区南半の遺構検出。穴や自然流路などが多数見つかる。
- 7.25 調査区北半の埋戻し完了。
- 7.27 調査区南半の検出状況の撮影。平面実測開始。
- 7.28 平面実測、土層図作成。
- 7.29 土層図作成で調査終了。
- 7.30 埋戻し完了。

## J 立会第2015-7次調査 平成27（2015）6月10日～6月18日

- 6.10 既存のコンクリート水路の東側（東区）と西側（西区）を水路にそって南北に重機掘削。地山上面で遺構検出。
- 6.11 東区で幅約5mのほどの東西溝を検出。
- 6.12 東区の東西溝は二条大路南側溝SD4006と判明。遺構検出写真撮影と実測を実施。
- 6.15 西区で東西棟建物SB10555の柱穴1基を検出。写真撮影、平面実測を実施。
- 6.16 東区の土層断面実測、柱穴の断割調査を実施。
- 6.18 コンクリート水路撤去後に、水路下を精査し遺構がないことを確認し調査終了。

## K 第557次調査（立会2015-9次） 平成27（2015）7月3日～7月21日

- 7.3 北新大池南側および東側の照明灯移設工事にともなう立会。掘削は現代盛土内におさまり問題なし。
- 7.6 No.7照明基礎部から東へ進み、No.5照明基礎部の手前まで壺掘り掘削。現代盛土範囲におさまり、問題なし。
- 7.7 掘削がGL-180cmに至るも現代盛土範囲内におさまる。
- 7.8 No.7照明基礎部より西側を深掘り。現代盛土内におさまる。
- 7.10 No.6照明基礎部も立柱部を深掘り。盛土の範囲におさまる。No.8照明基礎部はGL-170cmで灰色砂が現れ、灰黄粘質土との境に埴輪片が散在。記録を取り終了。
- 7.13～21 いずれの工事掘削も現代盛土の範囲におさまることを確認。立会終了。